

テーマ：歴史学とサステナビリティ

関連の深いコース：人間文化コース、ローカル・サステナビリティコース

1. このテーマを学ぶために

歴史学は、過去の社会のなりたちをできる限り忠実に明らかにしようとする学問です。この歴史学は人間環境学部の学びにとってどのように役立つのでしょうか。ここではサステナビリティ（持続可能性）という概念を軸に考えてみましょう。

歴史学では、サステナビリティは、ある社会が、その現在持っている政治や経済、文化などの仕組みを、その将来においても大きく変更することなく発展させていくことが可能である状態を指すと言えます。とくに自然環境との関係が中心になることが多いようです。過去のさまざまな地域の社会と自然環境との関係は、それぞれ異なっていました。それがサステイナブルなものであったのか、どの程度自然と人間は共生してきたのか。歴史学は、まず第一にそうしたサステナビリティについて考えていく際のベースメントとなる、基本的な知識やデータを提供することができます。これをサステナビリティの機能主義的理解と呼んでいいでしょう。

もう一つの可能性は、サステナビリティという考え方自体の中に、ある種の歴史性を見出していくというものです。サステナビリティは、せいぜい50年ほどの歴史しかない、きわめて新しい概念のひとつです。この概念がどのような事情から生まれ、どのようにして通用力を持つにいったか、それ以前にはどのような考え方があったのか、それを検証すること、すなわちサステナビリティの歴史的な理解も、人間環境学部における歴史学の重要な課題であると言えるでしょう。

そのような歴史的な存在としてのサステナビリティについて、さらに一歩進んで、歴史学はそのイデオロギー的な側面を問題化していくことも可能です。現代社会において、サステナビリティ概念は、特定の価値判断と結合し、道徳的な規範としての優越的な位置を要求することがあります。とくに自然との関係にのみ限定して理解される場合はこの傾向が強いようです。このような道徳的価値としてのサステナビリティは、そのほかの価値観とどのような関係を結ぶのでしょうか。たとえば、人権や民主主義といった価値観はどうでしょうか。自然環境との共存関係をはかりつつ、人権侵害をおこなうような社会は、サステイナブルと呼んでもいいのでしょうか。過去の事例に則して、こうしたイデオロギーとしてのサステナビリティの側面を問い直すことも、歴史学の射程に入ってきます。

このように、歴史学は、サステナビリティをさまざまな角度から理解することを通じて、過去の社会のあり方を検証し、そのさまざまな評価を可能にしていくものなのです。

2. テーマに関連した推奨科目

ヨーロッパ環境史論	日本環境史論	環境哲学基礎論	現代社会論
都市環境論	環境社会論	社会開発論	衛生・公衆衛生学
環境ビジネス論	市民社会と政治		